十三間房附近の暴風

家屋飛び、人畜忽ち幾丈の沙下に埋沒せられて、空しく不祀の鬼と爲るもの、古來幾千萬なるを知らず。是れ哈密(ハミ)より闢展(ピテン)に通ずる捷路に當る十三間房附近の光景にして、夙に暴風多きを以て著はれたり。

支那人は元來形容の誇大なるを以て稱せらる。流沙の稱の如き亦或は白髮三千丈の類ならんと、何人も思惟すべきも、誰か知らん啻に沙の流るゝに止まらず、鉅大なる阜丘も瞬時に其位置を變せんとは。

和闐の北方

和闐(ホーテン)の東北方なる沙漠中には、夏季屢〻西北より暴風の襲來することと有り、高さ六十乃至百二十米突に達する大沙山も忽ち消失して跡なく、若干の距離の平沙上に兀然高丘を現出し、處々小波狀を成して、風伯の猛威を逞ふせし餘波を留む。此時に當り、白日爲めに暗く、屋内燈火を要すと云ふ。流沙の稱、決して虛ならざるを覺ゆ。

老風口附近

其の他塔爾巴哈臺の東方なる老風口附近の强風も亦有名なるものにて、冬期を最も甚しとし、風位は概ね東北とす。故に其の附近には千若くは千五百米突毎に避難房の設置あるを見る。如何に其の風威の酷烈なるかは、之れを以て推知すべ